

1. チームづくりと自己表現

星野 欣生（南山短期大学教授）

はじめに、チーム活動の二つの場面を紹介したい。

【場面Ⅰ】チームに与えられた課題は、「あたえられたブロック（子供の玩具）をつかって、チームで今表現したいこと（もの）を自由にあらわしてみる」である。チームメンバーは7人。暫く沈黙がつづいたあと、メンバーの顔を見わたしていたひとり（A）が口火をきる。そのあと、終始Aがリードしてチームとして表現することを決めていく。Aの促しで意見を言っていくもの、なかなか意見が言えず何となく相槌をうつもの、一言も発言しないもの、表情が固く変化しないものなどなど。発言者が片よりながらも作業はすすんでいく。“楽しい広場”とテーマが決まり、ブロックをつかって創作活動にはいる。Aのリードの下に、ジェットコースターをつくったり、花壇をつくったりとチーム活動はすすむが、メンバーの動きや表情はさまざまである。積極的に手を出しているもの、楽しそうに振る舞っているもの、ひとつのブロックに手を出して考えこんでいるものなどなど。それでも時間内に作業は終了し、Aがその作品の説明をした。

【場面Ⅱ】チームに与えられた課題は、「この研修での体験をふりかえり、はなしあったあと“わがチームのあゆみ”のテーマでチーム表現をおこなう」で、素材はメンバーを含めて何を使ってもよいとされた。チームメンバーは7人。はじまるとすぐにメンバーBが口火をきる。そして、作業の手順や時間の振り分けなどをみんなで話し決定していく。そのあと、決めた手順に従ってメンバーは次から次へとこの研修での自分の体験を話しだす。前者の発言に関連づけるように次の発言がつづく。身振り手振りをまじえて話すもの、静かに話すもの、気持をそのまま顔に出しながら表情豊かに話すもの、話し手に注目しながらきいているメンバーたち。テーマにもとづくチームの創作活動にはいると、それぞれがいろいろな役割をとりながら適時リーダーシップを発揮してい

る。適度な緊張感をもちながらも楽しく作業はすすんでいく。チームは全体として一つの目標に向かってすすみながら、しかも、ひとりひとりがチームメンバーとしての存在感をもって動いている様子を伺いみることができる。

ここに紹介した2つの場面は、ある大学病院の看護部が実施している看護婦のリーダー研修におけるものである。いずれもおなじチームで、場面Ⅰは研修第1日目の夜のチーム表現、場面Ⅱは第4日目（最終日）午前中のチーム表現でのチームの状態を記述したものである。この研修会は、主任あるいはトップリーダーの研修として実施されたもので、研修の内容はチームづくりのトレーニングである。研修の場ではじめて出会った人たちが一つのチームをつくり、3泊4日の学習の中で、いろいろなチーム活動とそのふりかえりを繰り返しながら、チームづくりにトライしていく、その体験をとおしてチームづくりを学び、現場の組織活性化活動に適用していこうとするものである。（この研修の詳細は「チームづくりと組織開発」のテーマで別の機会に報告したいと考えている。）

このレポートではこの研修での二つの場面（前述）を比べながら、“チームづくりとメンバーの自己表現”に焦点をあてて考察してみたい。

最初に紹介した二つの場面は、チームづくりの初期と後期を対比させたものである。メンバーの参加の仕方、コミュニケーション上の諸問題、役割の取り方やリーダーシップのありよう、目標の明確化や共有化など目標に関する問題、仕事の組織化などさまざまな点でその相異をあげることができるし、それらの諸要素が複雑に交錯する中でチームが変化していくことは言うまでもない。しかし、ここではそれらを離れて、チームづくりがすすんでいくなかでのメンバーひとりひとりの変化に注目して考えてみたい。それはチームが変化していくなかでの個人の変化、あるいはメンバーが変化していくなかでのチームの変化というふうにとらえることができるだろう。

最初の場面にもどって考察してみると、【場面Ⅰ】では、Aというリーダー的な存在のメンバーが、自分の意図するままにチームをひっぱって行って作業を完成させている。メンバー全体の動きは緩慢であり、特定のメンバーへの依存度も強く、メンバーひとりひとりの意思表示も明確になされていない。研修の最終日、全体のふりかえりの話し合いの時に言われた事であるが、“あの時、私はあのテーマには賛成でなかったのだが、それを言ってしまうと折角進んでいるのがとまってしまっておもって言わなかった”“あの時は、メンバーの事がよくわからず、どうしてよいかわからないので、本当は面白くなかったのだが、いやな顔もせずだまっていた”などなど。これらは、グループがつくられ活動し始めた時に一般的に起こる事であるが、特に自己表現に関係のある事

柄を幾つかあげてみると、①自分の意見や感情を表面にださない ②何か言おうとしても、あいまいにぼかして言うことが多い ③儀礼的、みせかけの発言や行動をとってしまう ④求められないと発言しない ⑤やればよいと思ったことでも表にださない ⑥メンバーの中で話す相手が特定化してしまう ⑦メンバー相互に感情や意見を無視し勝ちである などである。共通して言えることは、メンバーそれぞれがいただいているグループの中での意見や感情をそのまま表に出すことができず、従ってそれに伴う行動も不明確なものであることが多い。リーダー的な存在のメンバーが方向を示せば、メンバーは自分の意見を表明せず、それにあわせるように意見をまげて追従することになる。結果として、チームの作業は完成するが、それはメンバーのリソースが十分に活用されたものとはいえず、また、メンバーの活動終了時の満足度も高低ばらばらで、全体としては低いことが多い。ひとりひとはチームのメンバーの一員として、その存在を認められ尊敬されているという実感が無いといつてよいだろう。

【場面ロ】では、リーダー的な特定のメンバーは存在せず、【場面イ】ではどちらかと言えば沈黙をつづけていたメンバーBが、口火をきって作業の手順についての提案をし、進めていっている。発言がかたより始めると、その事が課題達成に非効果的であると気づいたメンバーがその旨指摘し、それに促されて発言のかたよりも是正されていく。チームの雰囲気は明るく、メンバーの表情も柔らかい。それでいて適度の緊張感もあり、意見の対立もしばしば、それらの葛藤もメンバーの協力で解決されていっている。そこではメンバー相互の対立を歓迎しているふしすらみられる。言いたいことは全部言ってしまう、相手の言うことにひとまず耳を傾けてみようと言った規範がそこにはある。これらの状況は、チームがかなり成熟してきていることを示すものであるが、特に自己表現に関係のある事柄を幾つかあげてみると、①自分の意見や感情は、積極的にあるがままに表現していく ②発言するときは、前おきなど余分なものはまじえず、ストレートに短く表現する ③みせかけなどのよそよそしさはみられない ④自発的に発言し行動する傾向がつよい ⑤やればよいと思ったことは、ためらわず意思表示し行動にうつしていく ⑥メンバーは、誰とでも自由にお互いに強制しあうことなく話しあっている ⑦お互いに相手の感情や行動を尊重している などをあげることができる。共通して言えることは、メンバーひとりひとりがチーム活動のなかで、自由に、率直に、素直に、自分の意見や感情を開示していることである。そしてそれらの意見や感情、発言や行動は、一方的に批判されたり非難されることなくすべてのメンバーに受け容れている。つまり、メンバーのひとりひとりがそのチームのなかで一個の存在を持った人として認められていることである。したがって、時には、活動は必ずしも円滑に進まず、対決がおこり葛藤場面に出会う事もしばしばである。しかし、それらの葛藤や摩擦が起こることにおそれを感じていないし、むしろそれらをエネルギーとして、チームをより成熟する方向に進めようという共通理

解がある。メンバーのリソースは、チームの目標達成に向けて十分に活用され、作業終了時のメンバーの満足度もバラつきなく全体に高い。

ある会合で次のような質問をうけたことがある。“Tグループをはじめとするグループ中心の人間関係トレーニングは全体主義につながるのではないか。そのようなトレーニングの場では、みんなが同じように考え行動することがすすめられているように見え、また、それらの経験者はよく似た考え方や行動傾向をもっているように思えるから。”私はこの質問に対して、その場で即座に“NO”と答えたが。

組織の活性化を目標にしたチームづくりの目指しているところは、目標にむかってメンバー全員が同じ意見を持ち、一丸となって同一行動をとることではなくて、むしろその逆である。チームが成熟していくということは、そのチームのなかでメンバーひとりひとりの存在がより明確になっていくことである。ひとりひとりが異なった存在として、相互に認めあうことができることである。メンバーという個がチームという全体に埋没してしまうのではなく、むしろ、全体を否定するところで個の存在が明確になってくる。個が集合してチームという全体を形成していくのであるが、チームがひとつのかたまりとして、個を統制していこうという働きが強くなって、その過程で個が消滅していくときに残されるのは、個を失ったメンバーで構成されている全体主義的なチームである。そのようなチームの中では、メンバーは自由に自己表現することはできず、逆に抑制することが期待される。ありのままに自己を表現することはタブーとなり、メンバーはリーダー（的存在）の顔色をうかがいながら、発言し行動することになる。メンバーは、チームの中で自分が生かされているという実感をもてず、不安感と不満足感をもちながら流されていくことになる。リーダーの目標は達成されてもメンバーひとりひとりの目標は消えてしまう。成熟したチームというのは、メンバーひとりひとりが、チームの中でいまの自分を（いま考えていることや、感じていることなどを）その場で率直に表現でき、しかも、そのようなひとりひとりの自己表現がメンバー相互にありのままに受け容れられている状態である。そこから相互依存の関係が生まれ、相互信頼関係がうまれる。メンバーの関心はチームの仕事だけでなく、チームの中で起こっている様々な事柄（チーム・プロセス）にも向くことになる。また、リーダーや目標を外に求めることなく、自分たちの内から起こってくるものを尊重しながら、メンバーの手でそれらを作っていく。ルールや規則は尊重しながらも、柔軟に事柄に対処し、また、規範にとらわれず、メンバーの動きはダイナミックなものになる。

しかし、チームのなかで、メンバーが自己表現を自由に、率直にできるようになることは、チームの成熟と相関関係にある。それはまた、チームの文化の変化と深い関係をもっている。ここでいうチームの文化とは、チームの中で自

己表現を自由にしていくことに価値をおくことや、そのような規範をつくることである。そして、チームの文化をつくっているのは、メンバーであり、同時にメンバーはチームの文化に強く影響される。ということは、チームが活動していく中でひとりひとりが様々な機会をとらえて、すこしずつ、自由、率直、あるがままに自己表現し、そのことが色々な葛藤をひきおこしながらも、相互に受け容れられる時、チームの成長がはじまることになり、それにつれて自己表現が更に活潑化する。

その過程は、そのままメンバー個人の成長を促すと共にチームの成長につながっていくものである。



2. 神秘体験にみる自己表現

大 森 正 樹（南山短期大学助教授）

与えられたテーマは「自己表現と宗教体験」である。一体、このテーマでどんなことを語りうるであろうか。まず自己表現とは何の意味で、宗教体験とは何を指すのであろうか、と問うこともできよう。そして、仮にこの二つの語の各々を定義し、そこからこのテーマの指し示す範囲を決定し、しかる後に総合的に考察していく方法も考えられるが、それはあまり役に立たないように思われる。というのは、この場合、問題は言葉の意味ではなく、むしろこのような言葉によって表現される生の現場であると思われるからである。

ところで宗教体験と一口に言っても、人により、年齢により、またその人の精神状態により様々な段階の体験が考えられる。日々、平凡な宗教生活を送っている者にも、その時々、その心の状況に応じての小さな体験があるであろう。その様な体験が積もり積もって、ある時、その人を根底から揺るがし、根本的に自己を作り変えてしまうような大きな体験を味わうことがあるかも知れない。それはまだまだ発展、展開の余地のある生のさなかの出来事であるかも知れないし、もはや後にも先にも退けない、死に臨んだ極みの出来事であるかも知れない。

この様な宗教体験の種々相が考えられるが、今はこうした宗教体験のうちで最も典型的であり、最も人の目を引き、また最も日常性から離れたかに見える恍惚状態をその主たる特徴とする神秘体験に話を限ってみようと思う。このように極めて特殊な状況をまず考察することによって、問題は一層鮮明になるはずであろうし、それをモデルとすることによって、平凡きわまりないわれわれの生に一つの刺激を与えることもできようと思うからである。

ところでこうした恍惚状態を経た者は、自らの体験をほとんど他人に語りたがらない。かえって口を噤んでしまうのが通例である。そして、その体験が通常余りにも人間の五感を越え出ていることが多いため、必要あって、後に自ら

の体験を人に伝えようとする時、その表現は尋常の論理を大きくはずれ、逆説であるとか、矛盾したものいいという形をとる。それ故、この様な体験を伝えられる者は、自らの常識や論理をうちこわした彼方に現れる特別な体験を、即ち、自らの論理を一旦停止して、理性の働きをとめ、ただひたすらに己を空しくした時に現成するはずの無為の体験を思い描く他はない。

この様な体験を実際にした者は、一般的に神（絶対者）との合一をこの世で果たしたといわれる。そのことの真実性や当否はともかくとして、当人は後にその状況を言い表す時、その状況の主体は決して自分であるとは考えない。この「他ならぬ私」が、もし「私のみ」がそれを味わったと主張するなら、その時彼は神と合一しておらないし、またこれは真の神秘体験ではないであろう。それは彼の幻想に過ぎず、彼はその体験からは何ら有益なことを引き出しえない。私が、私が、と主張する悪しき意味での自己主張は、この様な体験とは全く無縁だからである。

即ち、高度の神秘体験においては、自己が何を体験したかは問題とならない。そこでは（少なくともキリスト教神秘主義においては）、無に等しい、被造物なる私にも神はかくも特別の愛を与えたもうた、それ故神は何にもまして称えられ、慕われ、求められ続けるべきものであること、又、その様な神に近づくようすべての人は心より願うべきであり、卑少な人間を神が無限の愛であわれみ給うよう祈願すべきことが説かれるのみである。つまりひたすら己を空しくして、神の恵みと愛を称え、哀れみを乞うことが眼目である。

であるなら、つまりこの様な神との合一において自己主張は初めから問題とされないならば、この体験の中では自己は神の中に滅却し去り、消え去り、その痕跡をいささかも残さぬ状態になるのであろうか。これについても、真正なキリスト教神秘家である限り、この合一は神と人とが全く一つのもの、境目もなく、つぎ目もない、融合しきった状態になるとは言っていない。神秘家は、神の大いなる、無限の愛に包まれるのではあるが、しかし神は神であり、自己はあくまで卑少な空しい自己としてとどまるのである。それは何のためであるのか。何故、神と人とは一つに融合し、どこから見ても一つのものとならないのであろうか。それは合一の目的が、分ちがたく結ばれた一つのものとなって、甘い蜜月にひたるためではないからである。多くの神秘家は、その様な合一の甘美の極に引き上げられるや否や、再びわれわれの世間にひき戻されている。この天上の蜜月は長くは続かない。それは何故か。

それは人間は卑少なものであるので、神とのこうした交わり自体が不遜なものであるからであらうか。そうではない。即ち、この恍惚状態は、神秘家がこの世を捨てて、神のもとに去り、一人至福の状態に入るのではなく、選ばれた者だけが味わうこの甘美さに逃避することなく、再び労苦の多いこの世の生に戻り、共にこの世の重荷を背負い、しかし決してそれに負けはせず、むしろ重荷を負うた者を慰め、力づけるための刺激剤となるためである。それは自

ら共に苦しむ者となり、自ら神の栄光を楽しむ者となり、その神の栄光に他者を招き入れる者となるための、いわば前もっての祝宴に与ることである。それは自分が楽しめば事足りるのではなく、他者にその楽しみを語り、知らせ、また他者もその楽しみに与るようすすめるためである。

それ故こうした神秘家たちは、尊い体験をした後、現実のこの世に戻り、そこで働くのである。たとえば、ロシア正教会の修道者らが、長い孤独と禁欲と祈りの生活の後に必ず人々の住む地域に戻り、そこで民衆の相談役になったことなどはそのよい例である。その際、人々の前に現れる神秘家の自己はまさに本然の自己であり、虚飾におおわれた、偽りの自己ではない。すべての人間が表すべき、また体得すべき本来の自己、神の像と似姿を獲得したものとしての自己である。従って、ここでは神秘家は自己をことさらに語ることなくして、本然の自己を表すということになる。

「神の国とは、聖霊の恵みである。神の国は今、私たちの中にある。聖霊は私たちを照らし暖め、さまざまな香りで大気を満たし、言いようのない喜びで私たちを満足させるのである。……神の友よ、これは神からいただいたすばらしい喜びである。これは“聖霊の充満の中に”居ることである。……主は謙虚な私たちを聖霊で満たしてくださった。……その恵みの現れは君にだけ与えられたのではなく、君を通して全世界に与えられたのである。君が強くなったとき、他の人々に役立つ存在となるであろう。」

これは近代ロシアで最も多くの人々に親しまれ、その意味では西欧のアシジのフランシスコに匹敵する神秘家、サーロフの聖セラフィームの言葉である（ゴライノフ著、『サーロフの聖セラフィーム』。ブジョストフスキ訳〔あかし書房〕173—175頁による）。19世紀のこの聖人は厳しい修行を多年積んだ後、サーロフの修道院に戻り、そこで訪れてくる人々を受け入れ、人々の悩みを聞き、霊的指導をし、相談を受け、各々に助言を与えた。またたびたびの恍惚状態を味わい、先の対話を書き残した俗人の友人、モトヴィーロフは、対話中にセラフィームの顔が光に包まれて輝き、直視できなかつたことを証言している。

この短い引用文からわかることは、神との深い交わりに達した神秘家は、先に既に述べたように、この喜びを決して一人だけのものにせず、その喜びにすべての人が与るよう呼びかけており、一人一人がそれに与ることによってこの世を聖化していくことを己が使命として自覚しているということである。彼は、その体験が厳しい修行を積んだ己にのみ与えられるということ強調するのではなく、その体験を友人（モトヴィーロフ）に分ち与え、かえってわれわれ（聖人とモトヴィーロフ）を神の方が包んでくれるというところを強調する。その体験は、しかし、何よりも徹底的な自己否定の賜物であり、謙虚たることがその条件である。

即ち、神との交わりを遂げるに至った者は、一度自己に死に、そして神の霊

の中で再び生かされて、この世の中に戻る。自己否定という自己の死を一旦通過した者は、自己を語る時、自己主張というエゴイズムの殻をうちこわしてしまう。それ故、そこに表現される自己は、個我をうちやぶった自己であり、先述の本然の自己の現れである。そして、その自己は言葉の領域においてのみならず、一挙手一投足までにも貫入し、しみわたり、ついで外へと現れる。このような仕方でも自己を表現できることが、宗教を奉ずる者の最高の望みであろう。

しかし、このような本然の自己が表されるためには、実は自己否定という通俗の人間にとって最大限の苦しい行為を経なければならないことが、聖人と凡人とをへだてる一大事であろう。しかし、たとえそれがどのように困難なことであろうと、われわれと同じ人間がそれを成就しえたということは、不肖なわれわれにとっての大きな希望であり、慰めではないであろうか。であるなら、われわれも本然の自己を表すひたむきな歩みに参入する勇気を得ることができよう。というのも、こうした神秘家を根底から終始支えたのは、他ならぬ神の子、キリストだからである。「わたしは道であり、真理であり、命である」（ヨハネ、14・6）と言われたキリストこそ、最も完全な自己表現をなした方ではなかったであろうか。



3. 現代文化と自己表現

樋田 大二郎（南山短期大学講師）

私たちは、うれしい時にはそのうれしさを、悲しい時にはその悲しさを誰かに伝えたい。そばに誰もいなければ、ひとりで踊ったり、歌ったり、言葉に書きとめたりする。また、私たちは、自分の存在を何らかの形式で表現したいと思う。仕事によって、芸術によって、あるいは人々に影響を与えることによって、わたしたちは自分の存在を明らかにしようとする。私たちは普段から、意識的・無意識的に自己の内的世界を外に向かって表現しようとしているのである。

ところが、ふりかえって見ると、これまで私たちは少なからずこうした自己を表現したいという欲求を押さえこんできた。時間的、物質的、そして精神的な余裕がないため、あるいは余裕があっても集団への過剰適応のため等々、私たちはほとんど自己を表現せずに過ごしてきた。とりわけ、お金のかかる表現や大胆な表現は、ごく一部の社会＝経済的地位の高い人や能力の人並み外れて優れた人とかが行い、他のほとんどの人は、メディアのこちら側でそれを受け取るのみであった⁽¹⁾。

しかし、ここに至って、自己の表現をめぐる状況に大きな変化が生じた。職場でも、家庭でも、余暇においても、かつては一部の人のものでしかなかった自己の表現が大手を振ってまかり通るようになり、ともすると表現が不得意な者には落後者のらく印が押されかねなくなってきた。まさに、過剰感度社会の到来であり⁽²⁾、感性差別化社会の幕開けである。我々は、今や、十分な材料と時間を与えられて、これでもかこれでもかと自己の表現を迫られているのである。

1. 自己表現と自己実現

現代人を追いつめている自己表現とは、そもそも何なのであろうか。我々は正体もわからずに自己表現に振り回されているくらいがある。そこで、まずは、

自己表現 (self-expression) および、それに近い概念で自己表現を考えるに際して重要な役割を果たすことになる自己実現 (self-realization, self-actualization) について定義してみよう。

広辞苑をみると、表現の項には「心的状態・過程または性格・志向・意味など総じて精神的・主体的なものを、外面的・感性的形象として表すこと。……」とある。また、自己実現（この概念も自己表現と同じように自己の何らかの内的なものを外在化することを意味するのであるが）は、同じく広辞苑の実現の項には、「実際にあらわれること。実際にあらわし出すこと。現実化すること」とある。

ここで、これら二つの概念の前に自己という概念を置き、広辞苑的に定義するなら、自己表現は「自己の精神的・主体的なものを、外面的・感性的形象として表すこと」であり、自己実現は「自己を現実化すること」となる。二つの概念の定義で最も大きな違いは、前者では「表す」が述語であるのに対して、後者では「現実化すること」が述語となっていることである。後者では前者になかった具体的な達成の意味合いが含まれている。

ところで、この定義で自己表現と自己実現の違いは明らかになってきたが、自己実現で現実化する自己とは何かはまだ明らかでない。そこで、さらに有斐閣の社会学小辞典で調べると、自己実現の項に、「自己の人格や能力が十分に活かされ、……」とある。広辞苑の定義を今見た社会学小辞典を参考に修正すると、自己実現とは「自己の人格や能力を現実化すること」ということができる。自己表現で外在化されるものが精神的・主体的なものであったのに対して、自己実現で外在化されるものは人格や能力といったその人の潜在的なベクトルや可能性である。

以上が、準広辞苑的な定義であり、一般にはこれで十分である。しかし、本研究ではこの定義に準拠しつつも、分析的に、上述の定義とは少し違う自己表現、自己実現の定義を行いたい。これまでになされてきた、分析的な自己表現、自己実現の定義の例として、広岡守穂のそれをあげることができる。広岡は、消費生活の場面での自己探究を自己表現、職業や仕事に結びついた自己探究を自己実現と呼んでいる。そして、現代社会では自己表現の機会が増え、自己実現の機会が減ってきた結果、自己実現を達成できない者が代償として自己表現を求めるようになったとしている⁽³⁾。広岡の分析的・概念装置的な定義付けは、事象の検討にとって非常に有効である。ただし、彼の定義は恣意的にすぎるところがあり、すでに見たような「自己表現」と「自己実現」が本来持つ意味の差異が見えなくなっている。また、自己表現と自己実現の機会の「増減」を検討するだけで、それぞれの意味が歴史的にどう変化してきたかを最初から考察の対象外に置いてしまっている。このため、文化と自己表現の現代的なかわりがとらえにくくなっている。

結論を先に述べるなら、本研究では自己表現を「自己の精神的・主体的なも

の表出的外在化」，自己実現を「自己の潜在的な可能性の道具的外在化」と定義したい。先程見た，準広辞苑的な定義と異なるのは，「表出的外在化」，「道具的外在化」という言葉を用いたことである。言うまでもなく，表出的，道具的という概念はパーソンの概念の借用であるが，これは表出的という表現を用いることで自己表現の情動的な側面を強調し，道具的という言葉を用いることで自己実現の対他的な手段の有効性を強調したかったためである。また，この定義では自己表現と自己実現を広岡のように領域ごとの概念とはしていない。同一の活動領域で同時に，例えば生産活動に従事しながら同時に自己表現も自己実現もすることができる。

なお紙数の制限があるので，本研究ではこれ以降自己表現を中心に議論を展開したい。自己実現ではなくあえて自己表現のほうに焦点を置くのは，これまでの研究が地位達成や地位配分などの自己実現的なものが多く，自律的・主体的な社会化過程全体を明らかにする上で自己表現的な側面の解明が緊急の課題となっているからである。

2. 私生活主義と自己表現

公式化して言えば，昭和30年代から40年代半ばにかけては，多くの人が職業生活をはじめとする公的領域の中にアイデンティティを捜しもとめ，公的生活を通して自己実現をはかろうとしてきた。「一人前の人間になるには精神的にも経済的にも自立することが不可欠で，そのためには職業をもち，仕事するのは当然だという観念が」脅迫的に我々の身に付いていたのである⁽⁴⁾。ところが，一方では知識社会化や管理社会化が進み公的領域での人間疎外が強まり，他方では公的領域での自律的活動が一部のエリートに独占されるようになり，人々は公的領域での自己実現から排除されてしまった。そして，その「はけ口」として急速に広がったのが，私的領域での自己表現であり，具体的には40年代後半から50年代にかけてのマイホーム主義や私生活主義という現象であった⁽⁵⁾。

しかし，当初は「はけ口」であり代償であった私生活主義も，その後の経済構造や文化状況の変化によって，もっと積極的な意義を持つようになってきた。私生活主義の当初は，私生活の領域は時間的にも物質的にも貧しいものであった。しかし，その後の生活水準の上昇や技術革新によって，私的領域が時間的にも物理的（量的にも質的）にも豊かになってきた。そして，このような私生活の向上を背景に，私生活主義の内実が団地の2DKへの逃避的な自己表現から，個性を重視し自己の感性や主体性を表現したり，能力や可能性を実現することへと変わっていった。

3. 自己表現をめぐる諸問題

このように私的領域での自己表現や自己実現は，しだいに豊かで充実したも

のようになってきたが、一方ではそれを否定的にとらえる見方もある。

まず、かつてと同じように生産の場での自己実現に重きを置き、私的領域での自己表現や自己実現をあくまでも代償としか見ない人たちがいる。このような見解については、ここでの議論を越えたところでの検討が必要である。

次に、現在の私的領域での自己表現や自己実現は企業によってつくられた文化を消費させられているにすぎず、真の自己表現や自己実現とは認めがたいという人たちがいる。この主張はある部分では的を得ている。DCブランド商品やビール戦争の例がよく用いられるが、多くの消費者が商品そのものではなく企業がつくったイメージを買っている。また、山崎がいう「柔らかな個人主義」⁶⁾にしても、良質のしかも個性的な商品がどんなに出回ったとしても、あくまでもつくるのは企業であり、我々は受動的な買手であることにはかわりはない。

しかし、我々の側も今や変わりつつある。決して、受動的な存在に留まってはいない。次節でみるように一部では、ミス・マッチ感覚を始めとした文化のコード破りもしているし、手作りを始めとした文化の生活サイズの創造も行っている。

最後に、これと似た観点からボードリヤールのように、商品がガジェット化し、交換価値ばかりが重視され、実質が失われていくことを批判する者もいる。これに関してはおそらく、商品だけでなく人々のコミュニケーションのレベルでもガジェット化は進んでいるのかもしれない。この問題については、次節でさらに詳細に検討したい。

4. 新人類たちの自己表現

前節で自己表現をめぐるいくつかの問題を指摘したが、それでは実際には私的領域での自己表現や自己実現が、果たして今後どのようなものになっていくのか、肯定的にとらえ得るものなのかそれとも否定的にとらえ得るものなのか、この問題を新人類と呼ばれる一歩先んじている人たちを例に検討してみよう。なお、すでに述べてあるように分析は自己表現を中心に行うことにする。

アクロス⁷⁾は、新人類を二つの下位カテゴリーからなる概念として定義している。最初のカテゴリーは、ハイティーンたちが主体で、戸川純のイメージの若者達である。かれらは、ミス・マッチ感覚に優れ、また、情報を断片的かつ大量にもっておりそれをモザイク画の様に再構成する。“ビョーキ”を健康的にとりいれてもいる。もう一つの下位カテゴリーは、20才から32・3才くらいの人たちが担い手で、浅田彰のイメージの若者達である。彼らは、新知識人でもあり、知的遊戯の感覚をもっている。また、思想をファッション化する先兵でもある。

これら新人類の自己表現の特徴としてあげられることの第一は、自己表現が主体的・能動的であることである。彼らは、知的にも感覚的にも洗練されてお

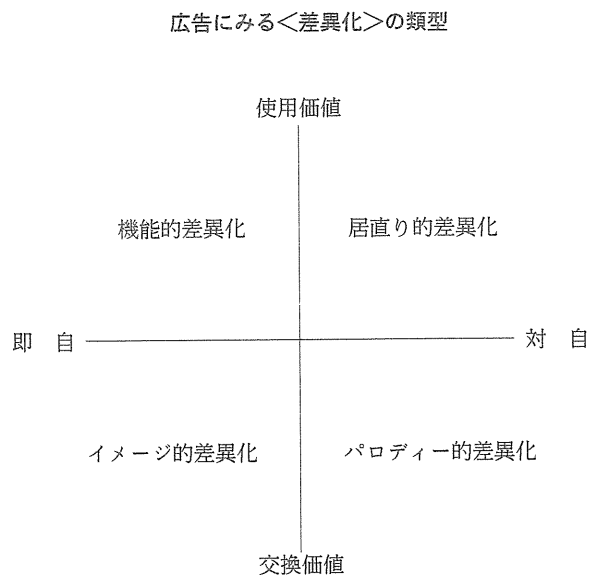
り、それらをもとにそれぞれが自分たちの生きかたにあった自己表現を行っている。例えば、ミス・マッチも新しいコードの創造であるし、思想のファッション化も知的遊戯と結び付いたものである。だから彼らのファッションは、同じように思想のファッション化であっても、かつてのジーンズのような画一的な主張ではない。

第二は、彼らは一面では孤立化しているように見える。しかし、それは感性重視の結果である。感性の合うものどうしでは、例えばコンサート会場などでは、孤立したままの彼らが異様な熱気をつくりだす。孤立化そのものは問題を含んでいるが、感性を殺してまでの連帯であってよいはずはない。感性をより成熟させることによって解決させて行きたい問題である。

第三に、彼らの関与している「物」はボードリヤールのいう意味でガジェット的、すなわち、実質的・機能的には効用がないものが多い。しかし、それらは単に実用的でないだけのものではない。ボードリヤールが言う象徴を越えた、いわば、超感覚的なものである。この点に関しては、稲増龍夫の広告についての研究が示唆的である⁽⁸⁾。稲増は、広告の発展段階を下図の四つにわけ、第一が、即時的な使用価値をうたえる「機能的差異化」の広告、第二が、即時的ではあるが交換価値に焦点がおかれる「イメージ的差異化」、第三は、交換価値に焦点が置かれるのは第二の段階と同じだが今度は対自的である「パロディ的差異化」、そして第四に、対自的でありかつ使用価値を重視する「居直り的差異化」である。新人類たちが反応するのは、これらのうち第三と第四の広告である。なぜなら彼らは、なによりもまず対自的なのである。自分の感性や知性で対象をとらえ直すのである。そして、彼らは「居直り的差異化」という新しい方法で使用価値にコミットメントするか、あるいは使用価値から離れているとしても、それは第三の段階にいる結果であり、単にイメージの世界に踊らされているのではな

く、丸山圭三郎がいうような我々を拘束している言分け構造の問い直しを行っているのである⁽⁹⁾。

新人類の自己表現の特徴をまとめると、まず、彼らは主張を含んだ自己表現や感性豊かな自己表現をしている。しかも、即自的に対象にとられるのではなく、意味の問いか



けを行っている。そして、与えられた素材ではあっても、自分たち流に再構成して自己表現を行っている。

5. ポスト現代文化と自己表現

新人類たちの自己表現が、時代のさきがけであり誰でもが知的、感性的にすぐれた自己表現をできる日が来るのか、それとも彼らの自己表現は現代文化という特殊状況の中で知的、感性的エリートたちのみが行いうるもので終わるのか、この問題については未だ議論の多いところである。

しかしながら、生活水準の向上、私的領域で過ごす時間の増加、商品の記号的差異化の強化などの要因を考えるならば、私的領域での自己表現や自己実現はたとえそれが他律的なものやガジェット化されたものであったとしても、今後量的にも質的にも豊かになって行かざるを得ないであろう。そして、それはいつか必ず我々の知的、感性的な洗練となって帰って来ると筆者は考える。

例えば、最初は劇場の雰囲気や芝居の雰囲気を「消費」するにすぎなかった者も、何度も足を運ぶうちに芝居の中味と自分との関係を問うようになるだろうし、さらにはその場に存在する一人として芝居を「生産」することになるかもしれない。そのような日が来た時、われわれはみな新人類になっているのかもしれない。

ただし、そのような日は無条件に歓迎することはできない。新人類の問題点、とりわけ、個性や感性を重視し多様化を押し進める結果、文化的統合を欠き、孤立化を招く可能性が強い。“統合”はデュルケーム以来、多くの研究者のメインテーマとなった問題である。そういった意味では古くて新しい問題であるが、この古くて新しい問題の現代的課題として、感性の共有化、感性の連帯をあげなければならない。

神話的、宗教的世界による統合や、政治的あるいは経済的な統合の問題とくらべて、感性の統合の問題はあまりにも明らかでない部分が多い。果たして、あのコンサート会場のような感性の統合が我々の求めているものなのであろうか。それとも、喫茶店で互いに雑誌を読んでいる時のような孤立的な統合なのであろう。今後、多くの側面からの検討が行われなければならない。

最後に、今回は公的領域の問題や自己実現の問題には触れられなかった。私的領域での自己表現とそれらとが相互に関連しながら変化していることは言うまでもない。それらについてもさらに検討しなければならないであろう。

(注)

- (1) 石川弘義編著『余暇の戦後史』東京書籍、1979や犬田充『欲望社会』中央経済社、1986
- (2) 成田康昭『「高感度人間」を解説する』講談社現代新書、1986。この他、感性時代の到来を検討しているものとして、星野克美他『記号化社会の消費』ホルト・

サウンダース, 1985や藤岡和賀夫『さよなら, 大衆』PHP研究所, 1984, 星野克美『消費の記号論』講談社現代新書, 1985などがある。また, 以上が記号論的に書かれているのに対して, 鮑戸弘『消費文化論』中央経済社, 1985は, マーケティングの立場から感性時代を検討している。

- (3) 広岡守穂『「豊かさ」のパラドックス』講談社現代新書, 1986
- (4) 同上, 45-46頁
- (5) 田中義文『私生活主義批判』筑摩書房, 1974や作田啓一『価値の社会学』岩波書店, 1972
- (6) 山崎正和『柔らかな個人主義の誕生』中央公論社, 1985
- (7) 月刊アクロス編集室編著『新人類が行く』PARCO出版, 1985
- (8) 稲増龍夫「商品の記号論」仲村祥一, 中野収編『大衆の文化』有斐閣選書, 1985所収
- (9) 丸山圭三郎『ソシュールを読む』岩波書店, 1983や『文化のフェティシズム』勁草書房, 1984

